

琉球大学医学部医学科同窓会の皆様

琉球大学医学部医学科 14 期卒業生 林健太郎

琉球大学卒業後麻酔科にて修業させていただき沖縄を離れた後もう 6 年の歳月がたちました。私は現在オランダ王立熱帯研究所での修学（熱帯医学の学位修得済み。現在国際保健の修士課程を修学中です）中の学生ではありますが、今回折り入って沖縄で地域医療にいそしむ、また亜熱帯という日本では特殊な環境で熱帯医学に多少とも関心のある琉球大学医学部医学科同窓生の皆様に緊急でお願いしたきことありまして文をしたためている次第でございます。

5 月初めのミャンマーでのサイクロンの被害は皆様もご存じのことと思います。私はこの度、所属している日本の災害医療 NGO、HuMA（Humanitarian Medical Assistance、人道災害医療援助会）の要請を受け、5 月 15 日に Amsterdam を発ち、5 月 28 日までミャンマーにて救援活動をしてまいりました。現地の被害は相当なもので、死者、行方不明者は 150000 人を超える大災害です。また雨期の始まりの被災は洪水による二次災害をもたらし、通年より 2~3 か月長引き 10 月頃まで続く予測されています。また被災地の大半はマラリア、デング熱といった蚊が媒介する致死的な病気の流行地帯であり、それ以外にコレラ等の水系感染症の発生が既に報告されており、今後これらは勢いを増して流行するであろうと予測され、多くの生き残った被災民がこれらの危機にさらされることは間違いありません。

私の所属する HuMA は現地の私立病院 Pun Hlaing International Hospital（[写真 1](#)）と提携し生き残った被災民の援助活動をすることに決定いたしました。私は国境なき医師団でのミャンマーを含めた様々な災害紛争地での経験（[写真 2-1](#)、[2-2](#)、[2-3](#)、[2-4](#)、私の CV や国境なき医師団のホームページ等を参照にいただければと思います。）、及び熱帯医学、公衆衛生、国際保健の知識を評価され、Pun Hlaing International Hospital 及び、HuMA の要請で、Pun Hlaing International Hospital が擁する医療チームの Medical Coordinator として招聘されました。いまだ混沌とした緊急状態が続く状況の中大きな必要性があるため、私はこれを Volunteer として引き受けることといたしました。災害医療、熱帯医療、地域医療、及び小舟を使った移動診療の経験の浅い医師達に教育を施し、また医療品の管理等について協力することとなりました。Pun Hlaing International Hospital の医療チームは、高度医療病院での経験豊富な医師、今回の災害を受け Volunteer として集結した現地の医師、そして研修医（90%強）と看護師で構成されています。しかし経験豊富な医師たちを含めこれら全ての医師達はこういった災害医療、移動診療の経験がなく、また熱帯医療に関してもその知識は長い間の政治的不安定から最新の教育を受けることができなかったため古く、すでに今回緊急の要請がありトレーニングを既に始めております。（[写真 3-1](#)）その上こういった災害時、熱帯医療に必要な医薬品の知識が欠けているため、医薬品の選定、梱包、輸送等の管理及び指導も始めております。今後チームの疲労を見て Rotation 等も考えねばならず、仕事は重要かつ膨大です。

また HuMA 及び Pun Hlaing International Hospital チームの担当する地域はマラリアの中でも致死率の高い熱帯熱マラリアの流行地であり、ここより感染が広がると全地域に壊滅的な被害をもたらします。それを防ぐために、WHO や、UNDP、UNICEF 等の国連機関とも連携し、マラリアに対する Front Line を引かねばなりません。（[図 1](#)、[地図 1](#)）。しかし難しいことに WHO や UNICEF もこういった感染症対策の物品はこの地域に必要な数だけ揃えきれないというのが現状です。Pun Hlaing International Hospital は以前よりミャンマーにあった私立病院なので今回皆様が危惧なさっているような横流し等の心配や輸入制限もなく、医薬品の入手はできますが、高価なマラリア診断キット、及びマラリア薬は自己資産を削って Volunteer で購入している状態で、国際援助の手が中々届かない今、大変苦しい状況です。

この10月まで続く生死を分ける状況は、一般に言われているような復興回復期とは程遠いというのが現状です。サイクロンによって家族を亡くした人々、特に今回のサイクロンで両親をなくした子供たちの心のケアも急務になっております。写真にて（写真3）紹介する子は死を覚悟した両親が木箱に子供を入れ濁流の中に流し、幸運にも生き残った人に引き上げられました。逆に死を覚悟した両親が子供たちをつぼに入れすべて沈んでしまったという話もあります。こうした人々の心のケアが必要なのはわかりきっていることなのですが、国際援助の手が届かない今ほぼ全てのことができません。現地の留学経験や臨床経験が豊富な多くの Psychologist 達はずでに取り組みを始めていますが、施設も何もかも吹き飛ばされ、流された今、屋根の飛んだ僧院や教会で行おうとしています。せめて雨期の中の雨風をしのげる最低の場所が必要ですが、資金、物資の流れが国際的に滞っている今どうしようもありません。学校もすべてなくなったため、Pun Hlaing International Hospital ではこういった心のケアの活動の中心となる、一時的な学校のようなものの建設も予定しています。

HuMA 及び Pun Hlaing International Hospital のチームは直接被災民を支援しています。未だ緊急状態という現状の中、上記に述べたように多くの良心をもった現地の人々が被災民に対して援助の手を差し伸べようとしているのですが物も資金もない今、苦しんでいる被災民に対しほんの少しのことしかできないというのが現状です。私達の Group は様々な制限のあるミャンマーという国で被災民に対して直接の援助のできる数少ない団体です。（写真4）にもかかわらず、我々の様な Group までも、ミャンマー政府の国際的な孤立のため、国際的に援助が受けられず、被災民に対して十分な援助ができないという現実があり、大変苦しい思いをしております。どうか被災民の救援のため私達の Group に少しでも援助をしていただければと思います。

ご理解とご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

林健太郎

HuMA－Pun Hlaing International Hospital Cyclone Nargis Medical Relief Team
Medical Coordinator

Kentaro Hayashi

振込先

みずほ銀行 根津支店 普通口座 8010278
特定非営利活動法人 災害人道医療支援会 理事長 鶴飼 卓

郵便口座 口座 NO. 00190-6-569149
特定非営利活動法人 災害人道医療支援会

写真 1 Pun Hlaing International Hospital



写真 2 - 1 私の以前のミャンマーでの医療活動と記事



では、父は「中国人」と自称して、吸煙店・居酒屋に配属しながら、日本人と見做らなければならぬ年々入ってきた。自ら手配していた終戦直後訪日団体の成分、日本軍と時局知らずの「家族旅行」の正体を知り、利己的な面を露わに「日本は好きなんだ」と「日本」を「かかわる」女の名を「助かると言う女」の名を述べた。小宮文子



ヤンゴン市内で托鉢(たくはつ)に歩く青年僧。仏教徒が国民の多数を占めるミャンマーでは日常的な光景だ。

戦後、永住誓った兵士



ムトン郊外には、小説の中で描かれているような大きな臥仙（がふせん）像があった

「文と写真 川辺徹」

ビルマ國軍の兵士だ
た。

[illegible]

遊步人

● 地球と遊ぶ
人のために

い、座中の重みを感じました。

レトロ風食堂で「幻の家庭の味」



味といえは、ワル
たが、大都市の中
衛生面を気にして
り行かなくなった
出現しているのが
堂を模したレトロ

食

小説
「ビルマの豎琴」の舞台
ミャンマー

JOURNEY
名作

「ルムの翼」一評論家ドイッ文筆家、山田道一（1903～84年）の児童向け小説「赤と黒」に1947年からの過年にかけて連載された。50年、文部大臣賞受賞。新聞文庫。市川崑監督によって大映映演化された。56年公開作品。は安井昌三、85年の作品。市川崑、宮城島寛を助役。

写真 2 - 2

国境なき医師団での Nigeria Mission。麻酔医、救急医として活動



写真 2-3

Sri Lanka, ジャフナ半島 Point Pedro での Mission。昼夜を問わず砲弾の飛び交う中で、救急医、麻酔医、及び Mass Casualty Planner として活動。



写真 2-4

イラク、クルド自治区、スレイマニアの外傷火傷センターにて、救急医、麻酔医、集中治療医として活動



集中治療室の仲間達



写真 3 - 1

下記の写真は先日 ミャンマーに訪れた際被災地に派遣される Doctor に対して Training を行った時の様子です。



質問を受けています。



隣の彼は国境なき医師団の活動にて共に働いていた同僚ラテ医師で彼に通訳そしてマラリア診断キットのデモンストレーションを行ってもらいました。



このような若い医師たちが被災地に向かい医療救援活動を行います。

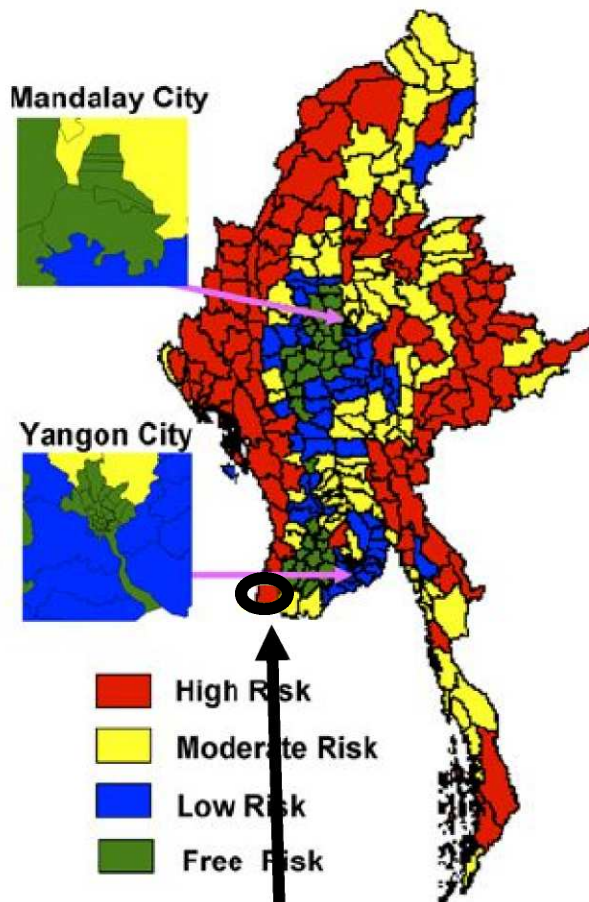


すでにこの中から 40 名の医師が被災地に向かい現在も医療活動が続けております。



図 1

マラリアの危険流行地域（赤色）は丁度私達の活動地域と重なり、ここで防がないと大惨事になります。



DOI: 10.1371/journal.pmed.0030393.g002

Figure 2. Malaria Risk Areas in Burma

The areas at highest risk are overwhelmingly along the frontiers, where civil conflict is ongoing and widespread human rights abuses have been documented.

Source: WHO Regional Office for South-East Asia [76]

この地域を担当する

地図 1

その上最大の被災地の一部であります。

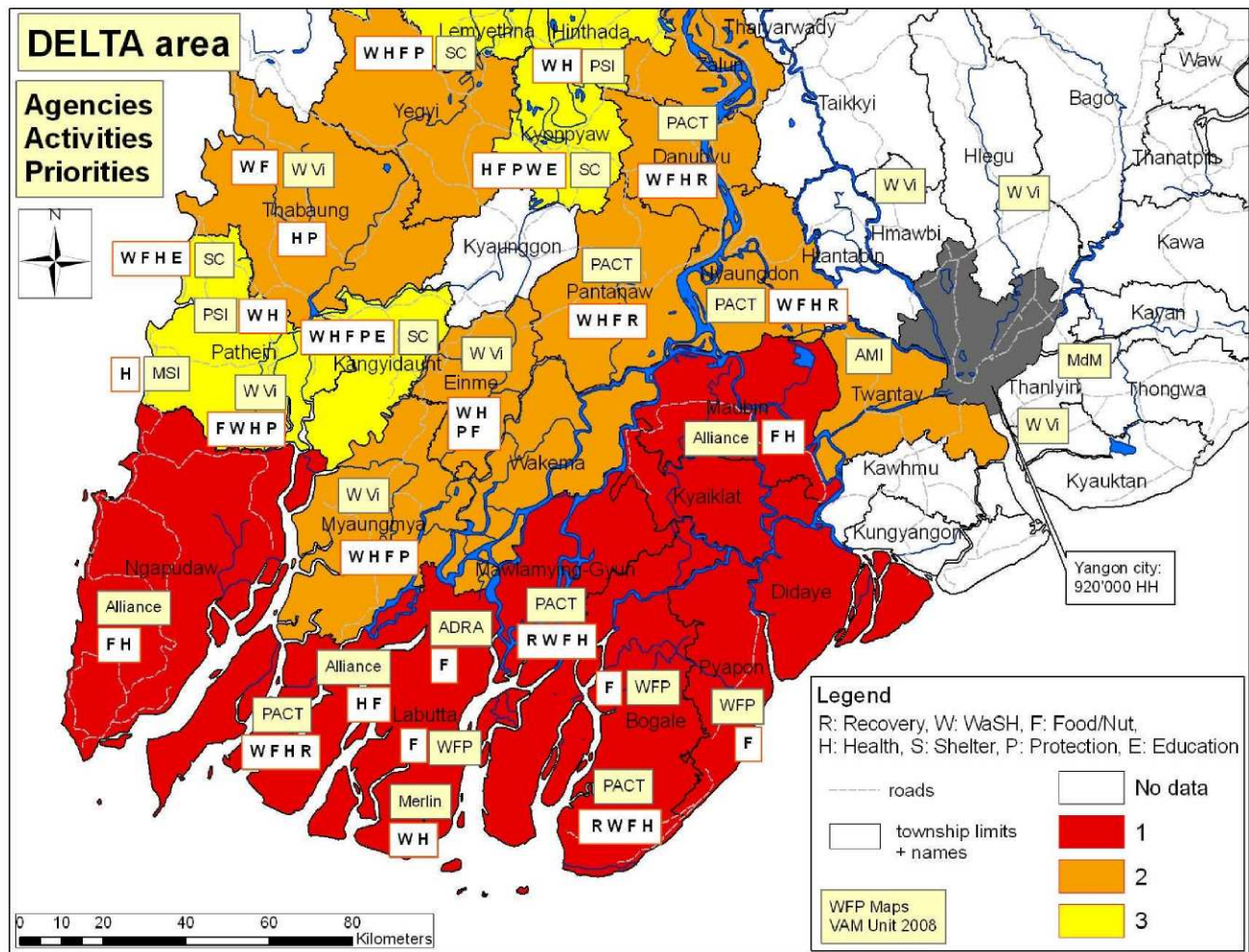


写真 3

この子供は上述の通り死を覚悟した両親に木箱に入れられ幸運にも生き延びた子供です。悲惨な写真も多くありますが、この場では控えさせていただきます。

この子以外にも両親を亡くした子は大勢います。またこの子供たちが、サイクロンにすべてを奪われ、マラリア、デング熱、コレラといった危機的な環境の中雨期が終わるまで生き延びられる保証はどこにもありません。



写真 4

これは National Staff に託し、被災した人々に食糧を配給している様子です。

